

『みどりのゆび』(2002年)

モーリス・ドリュオン／作 安東 次郎／訳
岩波書店

主人公の少年チトは、家族にも秘密にしている優れた能力を持っています。それは、親指をふれさせるだけで、どこでも好きに花を咲かせられるということ。純粹すぎるチトには、大人の“あたりまえ”が理解できません。だからチトはいつだって自分の心が正しいと思うことをします。読み進めていくうちに、どんどんチトのことが好きになってしまいます。



『園芸少年』(2009年)

魚住 直子／著 講談社

熱くないタイプの中학생篠崎は、高校に入る前の春休み、不良のような見た目の大和田と出会う。外見とは裏腹に親切にしてくれた彼と、篠崎は高校で再会。ほんの偶然から、二人で部員のいない園芸部に入ることになる。相談室登校で段ボールをかぶった少年庄司も加わり、植物の成長を通じて、少年たちもまた成長していく。



『植物図鑑』(2009年)

有川 浩／著 角川書店

河野さやかがマンションに帰ってきたら、男が玄関先で倒れていました。さやかは行き倒れている男を部屋にあげ、行き先が決まるまで面倒をみることにしました。男の名前はイツキといい、イツキのつくる道草料理はさやかの胃袋を驚掴わしづかみにしました。道草料理のレシピは巻末についています。



『からくりからくさ』(1999年)

梨木 香歩／著 新潮社

亡くなった祖母の家を貸すことになり、蓉子ようこは管理人として3人の下宿人と暮らすことになる。染料や織物に関心のある美大生の紀久きくと与希子よきこ、アメリカから鍼灸しんきゅうを学びに来ているマーガレット。いずれも蓉子と歳は近い。夏が近づくと、虫が飛び回る家に網戸を買おうと、伸び放題の庭の植物を食べて食費を浮かそうと果敢かかんに挑戦する。

同時期に偕成社より出版された『りかさん』が度々登場するので、こちらも手に取ってみて下さい。

『園芸家12カ月』(1981年)

カレル・チャペック／作 小松 太郎／訳
中央公論社

冬の寒さをのろい、夏にはバカンス中でも置いてきた庭が気になります。はたから見れば滑稽こっけいな動作でも、園芸家たちは至って真剣です。天候や害虫、その他あらゆるものに一年中頭を悩ませる園芸マニアの生態を、ユーモアたっぷりに描いた一冊です。作者の実兄であるヨゼフ・チャペックが手がけた、コミカルな挿絵も魅力的。格調高い笑いをあなたへ。

『種をまく人』(1998年)

ポール・フライシュマン／作
片岡 しのぶ／訳 あすなろ書房

舞台は現代のアメリカ・オハイオ州クリーヴランド貧民街の一角。絶望的な雰囲気ただよが漂うそこが変わりはじめたのは、一人の少女がはじめたある小さな行動からだった。マイノリティとしてアメリカ社会からはじき出された人々が、植物を通して再び他人と心をかよわせていく――。

小さな種からはじまる、人間の再生を描いた物語です。

